

東日本大震災復興支援フォーラム

日時：平成28年1月16日(土)15:00～17:30

場所：神戸クリスタルタワー3階クリスタルホール

開会・あいさつ（ひょうごボランティアプラザ 鬼本所長代理）

本日はお忙しい中、そして遠く被災地から東日本大震災復興支援フォーラムに御参加いただきまして、ありがとうございます。明日で、阪神・淡路大震災から21年目を迎えます。被災地から皆様をお迎えし、この5年間、兵庫、神戸の地から、被災地を支援した私たちが集い、現在の被災地の状況をお聞きする機会をここで持てますこと本当にありがとうございます。

死者・行方不明1万8千人を超え、発災後1週間の避難所の生活者が38万7千人を超えるという未曾有の大災害から間もなく5年になります。被災者の方々は、忘れることのできない災害の恐ろしさ、御家族を失われたかもしれない、そういう深い悲しみの中、様々な苦しみ乗り越えて暮らし再建を進めてこられました。

この5年で被災地はさまざまな苦難を乗り越え、工場や農地の再建、交通機関の復興など、復興の歩みは進んでいるように見受けられます。しかし、いろいろな事情で、仮設住宅から恒久住宅への移行の目途の立っていない方もおられます。町の人口流出、生活基盤の喪失あるいはコミュニティの崩壊など、決してもとの生活には戻らないというのも事実です。また、全国的には東日本大震災の被災地への支援の輪は減じつつあるとも言われています。

ボランティアプラザが実施または助成したボランティアバスがこの5年間で464台、1万1千人の方がこれを使って現地に行っていただきました。その活動の中で支援を続け、被災地の皆様とある意味では絆を築いてきた方々も含め兵庫、神戸のボランティアが被災地の方々と御一緒に話をお聞きし、これからの支援の思いを新たにする。そのような場にできたいと考えています。

今回、こうした機会を設けることができたのは、日本イーライリリー社様、兵庫開発有馬ロイヤルクラブ様、兵庫県立高校、神戸高校の皆さん、水墨画家の向山和子さん等の多大なご寄附の中で読売新聞社初め各方面の御支援で開催できました。フォーラムを開催できましたことを各方面に感謝いたしますとともに、この会議が実りあるものとなることを期待いたしまして、御挨拶とさせていただきます。

基調報告（村松淳司東北大学多元物質科学研究所長）

東日本大震災は、人的被害は約1万8,000人で、震災関連死が多い。名取市の閉上は、約5,000人住んでいたが、被災地は瓦礫等が片づいただけで何も変わっていない。避難者数は、発災直後の47万人から17万人と減っているが、まだ17万人いる。去年に比べると3万人減っていて、「終の住みか」に移っている人も多い。宮城県で沿岸部の市町は全部津波被害を受けて、この中で死者が出なかった市町はない。

「市町の震災復興計画」のやり方は2つあり、「高台移転・職住分離イメージ」。「道路施設」はほぼ終了。「鉄道」はあと常磐線が残っている。気仙沼線はバスの代行輸送を続けているが、鉄道の復活はないと言われている。仙石線は、「宮城県第一の都市」の仙台と「第二の都市」の石巻を結ぶ大動脈で、去年の秋に全線開通した。

「求人・求職のバランス」だが、「有効求人数」と「有効求職者数」のアンバランスが続き、若者が被災地から離れる要因となっている。

他の復興状況は、「農地関係」は進んでいるが、「海岸防災林」と「漁港（復旧工事）」は進んでいない。ほぼ復興を諦めた漁港もある。「港湾施設」の復旧状況は遅く、「海岸保全施設（復旧工事）」は全く進んでいない。市町村別で、女川町と名取市の復興が非常に遅れている。

福島の特異性としては、震災関連死/震災死亡者の比が宮城県と岩手県はほぼ0.1に対して、阪神淡路は、9年目のデータで0.15、福島県は、1.2で既に震災で亡くなった方を震災関連死が上回っている。福島県の子供たちの発育の問題が今月号の日本学会議の会誌にとりあげられている。

国勢調査の速報が1月12日に出たが、人口が一番減っているのは石巻市。次に気仙沼市、南三陸町と津波の被害がひどかったところほど減っている。

人口増減率が一番高いのは女川町で37%減、南三陸町29%、山元町26.3%と津波にあった地域は大幅に減少している。

震災孤児、震災遺児が、阪神淡路のときは約700人だったが、東日本大震災では約1,700人いる。「児童に震災が影響しているか」というアンケート調査では、「ある」と答えた校長が7割で、震災の影響が児童に厳しい。

「人が人として生きるための支援」が必要で長引く仮設住宅生活、復興のスピードの差があるが、これから「仮設住宅」から「終の住みか」へ移るなか、震災がつむぐ心の支援と

して、「人が自立するための支援」、「人が人として生きるための支援」が必要です。

パネルディスカッション

(コーディネーター) 古谷 禎一 読売新聞大阪本社 編集委員

(パネリスト)

村松 淳司 東北大学多元物資科学研究所所長

長沼 俊幸 宮城県名取市、愛島東部団地仮設住宅自治会役員

菅原 司 宮城県東松島市、小松南住宅自治会会長

湯河 沙妃 特定非営利活動法人 ワカモノデカラプロジェクト副代表

辻 俊介 兵庫県立大学 学生災害復興支援団体 I a n

○古谷氏 「現在の状況とこれからどういう支援が必要なのか」についてお聞きします。

○長沼氏 先に公営住宅に移る住民の心、仮設に残されていく住民の気持ちを考えると、ボランティアの力を借りながらやっていかなければと思っている。一部の人はことしの7月頃に、ある程度の動きが出てくるが、半分以上の人がまだ見通しも立っていない。

○古谷氏 復興公営住宅に移ってもいろいろな問題を抱えていると思うが、自治会長としての御苦勞をお話してください。

○菅原氏 震災から5年たって、入居して2年たってもそのままの気持ちでいる人がほとんどで、「気持ちの復興」がなかなか進んでいない。「自助、公助、共助」と言われますが、震災直後は当然「公助」で公のところにいろいろな物資的なもの、経済的なものでも頼る部分が大きかった。そろそろ「自助」という考え方も出てきていいと思っています。

○古谷氏 辻さんが、宮城県の南三陸町でどのような活動をされ、それに対してどういう手応え、反応があるのか、お話しください。

○辻氏 宮城大学の学生と「スマイル健康塾」を実施している。仮設住宅には、もともと同じ地域に住んでいた方々がばらばらになり、ちがう仮設住宅に住んでいる。その方々を一カ所に集め久しぶりに交流してもらい、その際に学生と一緒に体操とかして心を開放してもらおうというものです。

○古谷氏 「現在の活動とボランティアのやりがい」についてお願いします。

○湯河氏 と「たくさんの人と出会える」のが大きな魅力です。私たちは、地域の大人とか世代の違う方とあまり話をする機会がないので、ボランティアの際に話したり、さまざま

まな文化を知ることにより、社会人としての基盤をつくるものとして、ボランティアはすごく意味のあるものです。

○古谷氏 「人が人として生きるための支援」ということを言われましたがこのような若者の声をどう思われますか。

○村松氏 若い人がお年寄りと接することで外に出てくる。これは福島の「震災関連死」でふれたが、決して宮城も岩手も例外ではない。若者の活動は「震災関連死」を防止でき、「コミュニティの形成」にも繋がる必要な活動です。

○古谷氏 「現在のボランティア活動の課題とこれからのあり方について」はいかがでしょうか。

○村松氏 これまでは物質的なボランティアが多かった。これからは「人が人として生きるため、そこで生きていくため」の支援で「S t a n d - b y - m e」と私は呼んでいます。そういうのが必要です。それが被災者各自に必要なので、「もうすこしたくさんボランティアに来てほしい」という状況です。

○古谷氏 5年近くになって「心のケア」という部分がありましたが、何をしたいのかわからないという面もあるのではと思います。

○村松氏 集会所に行って一緒にお茶を飲んであげるといっただけで十分です。そういうボランティアが必要で、そういうものがないとまた悪い夢を見てしまう。

心の支えのために「人が人として生きるためのボランティア」というのは非常に重要で、力仕事も何も要らない。「来るだけでいいです。毎回足を運んでくれるだけで」それが最大のボランティア活動になります。

○古谷氏 「コミュニティ形成」にあたって、ボランティアはどのような支援ができるのでしょうか。

○長沼氏 閉上の場合は3年をかけて公営住宅という「終の住みか」に移転します。そうすると、少し気持ちが安心して外に出なくなる人が多くなって来る。そういう人たちを外に引っ張り出す力は、地元の人ではなかなかできない。ボランティアの力を借りて、いろいろな催しをして、まず出てきてもらうことが一番大事になる。

○古谷氏 「これからこんなことをやれるのではとか、こんなことをやってみたいというふうを感じることはないですか。」

○湯河氏 イベントとかを単発でもいいので、それを続けていくことが大事だと思います。

○古谷氏 「自助・共助・公助」という中で、「自立」という部分も忘れてはいけないと

いう話がありましたが、「それについてはいかがでしょうか。」

○菅原氏 「今後のボランティアに期待したい」ことは、物質的な役務的なものだけでなく、私たちの地元に来てもらえるのであればその際に、「震災5年後はこうだった」とか、「20年後の今はこうだ」といった精神的な心の面の話をしてもらいたい。

○古谷氏 「私たちが阪神・淡路大震災の教訓から何をしていかなければいけないのか」ということを、湯河さんお願いします。

○湯河氏 関西にいと東北の現状は伝わりにくいので、私たちが被災地に行き、そこで肌で感じて、目で見ても、それを関西に持ち帰り、みんなに伝えることです。

○古谷氏 今よく言われているのは企業の社会貢献です。「現状の活動報告と、企業としての役割をどう考えているのか」発言願います。

○北野氏 毎年「リリージャパン・デイ・オブ・サービス」を実施していますが、「地域で何かできるのか、自分のコミュニティで何かできるのか」という趣旨でチームをつくり、「チームの絆」であり「地域の絆」、または支援先となっている「東日本との絆」に思いを寄せて活動をしています。

○古谷氏 有馬ロイヤルゴルフクラブの大林さん、こちらはゴルフのプレーに来た方々に募金を募っているそうですか。皆さんの反応はいかがですか。

○大林氏 募金チャリティーという形で参加されませんかと言いますと、皆さんこぞって参加してくれます。私どものブランドにもつながります。

○古谷氏 村松先生、今後の支援のあり方、「人が人として生きるための支援」に向けて、まとめをお願いします。

○村松氏 コミュニティづくりについては、「皆さんにおいでいただくだけでいい」し、逆に「忘れない」という支援も支援です。企業が「ボランティアをするボランティアをバックアップするボランティア」も必要ですので継続してもらいたい。いわば戦友のような人たちに来ていただく、それが兵庫ならではです。それは阪神淡路があったからですが、東北の被災者はみんな神戸の人が関西弁を話すとすごくほっとするのです。ぜひ遠いですが来ていただいて、「5年だったらこうだ」とか、「20年たったらいいこともあるよ」というようなことを話してもらって希望が持てるし、やっていくぞというときの力になる。だから、もはや「自立」していくための支援で、「Stand-by-me」でちょっとだけ支えていただくというような感じが必要です。「これからは自分で生きてゆく」というのは必要ですし、それがないと被災地は被災地としていつまでもそのままになってしまい

ます。それから、若い人はぜひ来てもらって、自身のボランティアの高揚につなげてもらいたいし、それがひいては私どもの自立あるいはコミュニティの形成に繋がる。決してボランティア活動のメニューがなくなったわけじゃない、来ていただければやることはいっぱいあります。

子供たちについては、5年目になって悪い部分が出てきています。いわゆる「フィードバック」です。あ那时的の5年前の体験を今感じている子供も多いです。あるいは、福島県の例のように「発育障害」というのも出てきています。それから、「福島の特異性」というものもあります。宮城県だけではなくぜひ福島にも来ていただきたい。「若者から年寄り、そして子供への支援」という意味では、継続的に心のケアをしていただければと思います。

○古谷氏 ボランティアを社会全体で支える仕組みが必要だと言われますが、せっかく兵庫から芽ばえてきたボランティア文化をさらに定着し発展を育てていくために、本日お集まりの皆さんにも関心を持っていただき広げていただければと思っています。この兵庫にいてもできることはあるのではないかというお話も先ほどありました。忘れないということも大事だと思います。

全員ミーティング

(ファシリテーター)

野崎隆一 東日本大震災まちづくりアドバイザー

東末真紀 東日本大震災まちづくりアドバイザー

(意見交換・意見交換の振り返り・まとめ)

○東末氏 進行者は東末で、最後のまとめを野崎氏にお願いします。それでは、早速グループで話し合いに入りたいと思います。

自己紹介カードを出してください。もう一つは、色つきのブルーの、A4半分ぐらいの短冊型の紙を出してください。各テーブルの上にマジックがあると思います。色に余裕があれば、各自、違う色のマジックを使用してください。テーブルの上に大きい模造紙があります。貴重なお話を東北の方にさせていただけますし、御支援をされている方々にもお話をいただこうと思っていますが、模造紙はテーブルの共通のメモ用紙として使用してください。まずは、自己紹介タイムを取りたいと思います。自己紹介も、模造紙に書いてくだ

さい、一人30秒以内で自己紹介をお願いします。

(各グループでミーティング)

次は、このブルーの紙を使いたいと思います。各テーブルに東北から来られた方がお一人、ないし二人座っています。東北の方々にこんなことを聞きたい、支援の方向性とか課題を考えていくに当たって聞きたい質問を、この短冊型のブルーの紙に横書きで今から二、三分で書いてください。東北の方々にもブルーの紙を配らせてもらっていますが、純粋に兵庫県の人たちに聞きたいことを書いてください。これをもとに後ほどの議論に入りたいと思いますので、今から2分間でこれを書き上げてみましょう。

時間になったら終わりますので、先に聞きたい人から、まずは質問を大きな紙の上に置いてください。おもしろい話とか、ためになる話は、模造紙にメモを残してください。質問を貼り、その下に議論した内容についてメモをとる。時間は、5時で1回切ります。時間内でいろいろお話し合いをしてください。

(各グループでミーティング)

時間が来ました、終了とします。

それでは、テーブルの上に白いA4サイズのコピーの紙を横に使いたいと思います。議論をしていただいた内容が模造紙のほうにたくさん書かれています。心に残った言葉、お題としては、「支援の課題とか方向性につながるような議論」というような話をいただいています。心に残ったとか、ヒントになったという言葉を書いても結構です。今から2分で書いてください。一人1枚です。読み上げてグループ内で共有してください。では、お願いします。

(各グループでミーティング)

それでは、このグループでのディスカッションの時間、話し合いの時間を終了です。今からマイクを回しますからこんなことを書きましたというのと補足の説明をして、御感想も述べて下さい。

○野崎氏 10グループの本田さん、「少しでも一緒に過ごす。一緒に」その心を少し補足してください。

○本田氏 今回いろいろな話をさせていただいて、震災のことだけではなくて観光のことも聞けました。神戸と東北は離れていて、行くのにも時間がかかりますが、直接会って一緒に過ごす時間が大切と思いました。

○野崎氏 東北から来られている菅原さん、ラジオ体操と書いているだけです。その心は。

○菅原氏 若い人がいろいろな活動で来て、ラジオ体操をやってもらうというのが一番いいと思って書きました。

○野崎氏 12グループの湯河さん、なかなかおもしろいことを書いてます。

○湯河氏 一緒にお話をするだけでも被災者の方に元気をいただけるし、私たちがまた来ますというそのなにげない言葉だけど、そこにすごく元気をもらったというお話をしていたので、言葉にはすごく可能性があると思いました。

○東末氏 5グループの入山さん。お願いします。

○入山氏 クーラーとかエアコンを夏に冷房じゃなく暖房としてつけ間違えていたというのがあったり、1人で住んでいる方も多いというのを聞いたので、定期的に誰かが見回ってくれたりすることで、安心とかもあるのではないかと思います。

○東末氏 3グループの木下さん、お願いします。

○木下氏 「私は東北に行く」村松先生がいつも挨拶をされるときに、どういう形でもいいから来てよ。観光でも、遊びでも、欲を言えばボランティアをして観光してお土産買って下さい、お金を使ってくださいと。とにかく行って見ないと現地のことはわからないということです。だから、できる限り行き続けたいと思っています。

○東末氏 6グループの戸田さん。お願いします。

○戸田氏 私は本当に足を運ぶだけでいいのという問いをさせてもらったのですが、その中で同じ思いをしてほしくないという言葉いただきました。同じ思いをしないために私たちができることって何だろう。何をどこまでどういうふうにかっちでやっていったら効果的なのか。地域の方に根強く浸透していくのか。そういうことをみんなで考えることじゃないかなと思いました。

○東末氏 伊藤さん、話し合いを経てどんな感想をお持ちなのかということをお話していただいていいですか。

○伊藤氏 来てくださることがものすごくうれしくて、それでどんなに風が吹いても、荒

れても、窓拭きとかいろいろやったださるから。おばさん方で何かできることがあったらという感じでカレーをつくりました。私たちはできる範囲でやっていますので、余りにしないでいただきたいと思うのです。来てくださることが本当にうれしくて、きょうもこういうふうに参加させていただいてありがたく思っています。

○東末氏 この時間を終わらせていただきたいのですが、野崎氏から、コメントをいただきたいと思います。

全体総括

○野崎氏 総括コメントになるかどうかはわかりませんが、感想をお話して終わりたいと思います。被災地も5週年了をもうすぐ迎えます。神戸のときの話も聞かせてほしいという話がありましたが、神戸でも5年というのの一つの大きな節目でした。ハード面の復興が大体5年で一段落して、公営住宅もできて仮設が解消されていった時期が5年目です。実はそれ以降、いまだに復興が終わったのか終わらないのかわからない状態になっています。兵庫県も、いまだに復興フォローアップを行政も取り組んでいます。だんだん復興なのか平常時の課題なのかどんどん見えにくくなってきています。そういうところで、「コミュニティとか暮らし」がこれから大きな課題になってきます。「コミュニティとか暮らし」というのは、行政がやるものではなく、それぞれ被災した皆さんが自分で取り組み、自分たちで話し合いをして知恵を出し合わなければいけない、そういういわばソフトの暮らしの復興の本番が5年で始まると感じています。神戸の場合も同じでした。それが今でもまだ続いているという状況です。

いろいろ感想をいただきましたが、だんだん支援に行っているつもりが、いろいろ触れ合いをして、かえって行ったメンバーが感謝の気持ちで帰ってくるというようなことが起こっています。ですから、支援する側とか支援を受ける側というふうな関係がどんどん変わってくる。

実は、一昨年11月にハード面の「まちづくりのフォーラム」をやりました。そのときの最後の締めでパネルディスカッションのメンバーがそれぞれ言ったのは、もう支援じゃない。逆に、我々が行くことで学ぶことがたくさんある。だから、「一方的に何かをしてあげているのではなく、学ぶこともある。」これはもう「支援」というよりは「交流」をやっているというふうに捉えるのがいいのではないかというのが実感でした。ですから、これからもボランティアバスは続けて若い人たちを東北へ送っていきますが、受ける側も

支援をしてもらっているというよりは、若い人たちと「交流」を続けているのだという気持ちで受け入れをしていただくとうれしいと思います。

きょうは皆さん、遠いところから来られた方々も、地元できょうのために時間を割いていただいた方も、長時間にわたりましたがありがとうございました。

「幸せ運べるように」合唱

閉会あいさつ（高橋守雄災害支援アドバイザー）

本日は、震災20年の締めくくりのフォーラム、そして明日から阪神淡路では新しい21年、そして東日本では間もなく5年を迎えます。

私たちは、明日から新しいステップの阪神淡路大震災21年目を歩みます。そして、東日本では間もなく5年目を迎えます。我々は兵庫から、遠いところからボランティアが行きやすいそういう社会構築を目指して、災害ボランティア割引制度、災害ボランティア割引制度で多くのボランティアが遠くからもすぐに被災地に駆けつけられるような制度を、世界で初めて日本で立法化してもらおうと活動も行っております。皆さんのほとんどの方が署名をしていただいたと思いますが、さらにこれからどんどん運動を進めて、一步一步前進していきたいと思っています。

本当にきょうは熱心に御討議いただきすばらしいフォーラムになったと思います。最後になりましたが、皆さんの御協力に感謝しまして、あいさつとします。本当にありがとうございました。（拍手）